市民病院発

ほのか診察室

問 市民病院　総務課　TEL23-7852

シリーズ第37話

胆石（たんせき）・胆のう炎のお話

市民病院　消化器科・外科
診療部長　横井佳博（よこい よしひろ）

胆のうはナスのような形をしています。胆管によって肝臓と十二指腸に接続しており、胆汁を一時貯蔵させます。胆汁は肝臓で作られますが、胆のうで貯留している間に塩分や水分が吸収され濃縮されます。そして食事をして胃から十二指腸へ食べたものが送り込まれると、物理的刺激で胆のうが収縮され胆汁を排出します。また同じく膵臓（すい）から膵液が出され、胆汁と膵液が一緒になって、食べ物、特に脂肪分の消化を助けます。

胆のうの病気といえば胆石症が有名です。日本人の10人に1人は胆石を持っているといわれており、胆石があっても症状が出ないこともあります。人間ドックなどで初めて見つかることも少なくありません。症状が出ない場合は経過を観察しますが、結石は体にとって異物になるので、いつまでも大事に持っていてもいいものではありません。

食事をすると胆汁が排出されますが、この胆汁の通り道に石が詰まったりすると、右上腹部に激痛を生じます。これが胆石の疝痛（せんつう）発作です。俗に転げまわる痛みと表現されることがあります。この疝痛発作が出て病院に運ばれ、そこで初めて胆石だとわかる場合もあります。しかし、胸にも痛みが走っていると感じることがあり、心臓病と間違われることもあります。

胆石の初期症状としては、背中の違和感や脂っこいものを食べた数時間後に、右上腹部・心窩（しんか）部の不快感や軽い痛みなどです。痛みはしばらくすると楽になります。発熱を伴う場合は胆のう炎や胆管炎を起こしていることもあり注意が必要です。急性胆のう炎の90％は胆石の存在があり、これは胆石が胆管に蓄積し、閉塞（へいそく）することで炎症を引き起こすことが原因です。胆のう炎は血液検査で炎症があることがわかり、超音波検査・CTなどの画像では、胆石の発見、胆のう壁の肥厚（ひこう）によって炎症を起こしていることが診断されます。胆のう炎の治療は絶飲食で点滴し、抗生物質を投与します。

胆石症と診断がついたら、治療を開始します。経口（けいこう）胆石溶解剤を内服して、胆石を溶かす治療法です。この方法は治療に長期間かかり、胆石の再発の恐れがあること、胆石の種類によっては効果がないものもあります。また体外式衝撃波破砕療法といって衝撃波によって胆石を細かく砕く方法もありますが、かえって治療が難しくなることもあり当院では行ってはいません。

外科的治療（胆のう摘出術）は手術による治療法で、病気の胆のうを結石とともに切除することで、確実に1回の手術で胆石症を根治（こんち）できる方法です。開腹し直視下に胆のうを摘出する方法と1990年代から内視鏡を使用して行う腹腔鏡下（ふくくうきょうか）胆のう摘出術が現在の標準的な手術となっています。当院でも原則として腹腔鏡下胆のう摘出術を採用しています。この手術は傷が極めて小さく、術後の痛みが開腹術に比べて少なく、翌日からどんどん歩けます。術後順調に経過すれば4～5日で退院でき社会復帰も早く可能になります。

胆石で困っている方がいましたら、消化器科・外科を受診してください。